

審査委員長 講評

川上 元美（デザイナー）

「雪は天から送られた手紙である」というあまりにも有名な言葉で広く知られる中谷宇吉郎は、水の惑星と呼ばれるこの地球上の雪、氷、霜、霧と変化する水のふるまいを追いつづけた自然科学者です。

氏が示してくれた、天空で雪の結晶が成長する時の気温や雲の水蒸気の多少により、六花の樹枝状、星状、広幅六花や、ときには針状や角柱、角板、鼓型、などと実に美しい結晶が千変万化に現れる様は実に感銘的です。塩や砂糖、明礬（みょうばん）や様々な鉱物の結晶の妙、そして近年の電子顕微鏡で見るミクロな世界の物理化学的現象の中にも、ハッと自然の造形がありますが、おそらく雪の結晶は中でも出色のものでしょう。

常々、デザインは「美」と「科学」の融合をとおして豊かな生活環境を創出することに有り、このことは時代のテーマであると思いながら、この「雪のデザイン賞」の審査に携わってきて、改めて雪の結晶の造形や現象の妙に心を奪われること頻りです。

そんな雪をテーマにした暮らしのデザインコンペが、第5回を迎えました。そしてこの雪の科学館がオープンして15年を経ると云う。

今回は、審査会が初めてこの館の中で開催されました。雄大な白山を背景に抱き、柴山瀉の美しい湖畔にあるこの科学館は、磯崎新の設計に因ることは広く知られておりますが、私は、氏の作品の中でも名作に位置するものと思います。そして余談ですが、この科学館の六花マークもなかなかとっていたところ、大学時代の同級の、上条喬久のデザインであることをごく最近知って驚いたものでした。

この「雪のデザイン賞」の受賞作品で、当館に寄贈され、コレクションされている作品が、縁あって、先般和歌山県の「熊野古道なかへち美術館」で展示公開されたり、第

3回の佳作賞の「六つの花こおり」が科学教材としても優れているということで、小さな装置が量産されたり、第4回のラトビアからの応募で銀賞を得たタペストリー「CONNECTION」が詩集の表紙を飾り、詩家と、ラトビアとの交流が始まる等、コンペを核にして様々な形での発信が始まっております。また、今年は韓国化粧品メーカーのスポンサーシップによる「ラネージュ賞」が新設されて、新しい話題を呼ぶ嬉しい出来事でした。

今回も、全国各地からジャンルを超えた作品が集まり、またラトビアや韓国など国外からも54点の作品が寄せられて、応募数は332点を数えます。

様々な素材や技術を用いて、雪や氷をテーマにした豊かな表現力による優れた作品が集まりました。そして、その内容、質が総じて高くなっており、それぞれの作品に内包された技術の蓄積や、新しい発想に目を見張るものがありました。

今回も集まった作品を画像で検討し、合議の末51点が第一次を通過、二次審査は例年と同様、現物作品による審査を経て、各賞が選ばれました。

今年の金賞は、白磁抜釉彩鉢「雪層」の大鉢。鉢全体に計算された不規則なストライプのマットと艶の白が美しい。あたたかも、吹雪により真っ白な雪原に刻まれた雪紋を想起させて、力強く存在感のある力作です。何を盛り付けようかと、イメージが膨らみません。

「ラネージュ」賞は、「air snow」と名付けられた、羊毛とスーパーオーガンザーを用いた純白に透けるケースメント、ひらひらと舞降りる雪の軽やかさの表現が秀逸です。銀賞の「六花」はミラフィオーレの技法を使った美しいガラス皿、白い雪の結晶がフラクタル模様のように、瑠璃色のベースに降り重なり、その溶解の変化が、奥行感を表現して興味深い。また、銅賞の「cracking plate」はバケツに張った薄氷の上に、なぜか、雪の結晶が残ったままに成っているという、不思議なイリュージョンを形にとりだしたもので、プラスチック素材で、精緻な雪の結晶を表現してみせた新鮮な作品と、どれを

とって力作で、奨励賞、佳作賞に輝いた作品も、伝統技法と新しいデザインの融合、インスタレーション、映像と、雪のイメージの広がりはそれぞれが素晴らしく、評価の高い魅力的な作品でした。